

学園ニュース

富山大学

NO.27

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和53年6月20日

昭和53年度入学式学長告辞

学 長 林 勝 次

昭和53年度入学式学長告辞

御入学をお祝いたします。

諸君は立山をごらんになったことでしょうか。雄峰立山はまだ白雪皚々ながら厳冬の様相です。しかるに、山の麓はすでに梅が咲きこぼれ、桜もほころぶ陽春の季節です。即ち寒と暖、北と南、厳と寛、陰と陽と全く相反するものが、それぞれ相関しながら展開していく大宇宙の厳然たる姿です。

現在の諸君もまた然り、苦しかった受験生活から解放され、いよいよ主体性をもった大学生活に転換する記念すべき日であります。このときこそ、あらためて大学に志した目的、今後の目標を冷静かつ真剣に考えるべきでしょう。

“初心忘るべからず” 固い決意こそ大切です。ややもすると、大学入学の興奮が覚め、緊張感を失い、最も大切な入学の目的、目標までも失って虚無感のとりことなり、脱落することのないよう、いまから心を引き締めていただきたい。

御存じのごとく、大学は敢くまでも研究と教育の場であり、文化の伝達、伝承と新しく造り上げる創造の機能を発揮する学問の場であるから、それに伴う学習を否定することはできません。学習と研究は大学における諸君の権利であり、この権利こそ存分に発揮して欲しいものです。特に、大学院研究科の諸君には、大学における科学研究の重要性は自由な発想による先駆的、独創的研究を進めて、人類の永生と幸福をもたらすことが強く要請されております。

最近の科学は、一方ではミクロの世界から他方では科学衛星まで、その進歩発展は驚くほどです。研究の

最先端はますます精密・緻密化し、また実験計測、データ処理などの装置や方式も急速に開発大型化し、大規模な研究観測手段なしには、その最先端を切り開くことが不可能なほど研究分野が拡大しています。

その上、社会的要請の増大という、研究の外在的な状況の変化が生まれています。即ち、全人類が総力をあげて取り組まねばならない多くの課題が待っています。エネルギー、食糧、資源、人口問題、環境の保全、海洋の利用、地震や災害、ガン等の難病研究など、人類の生存にとって速やかに解明すべき緊急の問題が山積していることです。真理の探求、科学の研究には終着駅はありません。諸君は無限の力を信じ、これを発揮する努力と根性が必要です。

大学はまた人間形成の場であり、青年後期の人間形成の仕上げのときです。大学における人間形成は、先ず学問を通してのものですが、課外活動による面もまことに大であります。スポーツを愛し、頑健な体を造り上げることが肝要です。

いま日本が直面している重要問題の一つとして、青少年体力の低下があります。かつては世界一勇敢であり、強かった国民が世界一弱い国民に成り下がったことです。男17才、女15才で生長がストップし、老化現象が現れてくることは、日本民族にとってゆゆしき問題です。受験教育、家庭教育、社会環境等いろいろの原因はありまじょうが、よくこれに対処し、体力、頭脳、機能、バイタリティの充実した立派な青年を指向していただきたい。また、個性をのびし、豊かな人間性を培うための文化活動も意義あることです。

大学の自由は学問の進歩、社会の発展のために極め

て重大なものとの認識によるものであって、自由に対する責任と自立性がなければならぬと存じます。

諸君は生まれながらの才能を伸ばし、助け合い、責任を分かち合う協調と連帯の精神が現代社会に必要であり、国際社会においても相互依存が不可欠な時代であることを思い、大学において将来国際社会に活躍できる能力を養っていただきたいものです。

戦後30年科学技術の進歩により、すばらしい経済成長と繁栄を成し遂げた日本が、今日社会経済、国際経済の面において多くの困難に直面しております。

地球上の総ゆる資源が有限であり、一方21世紀初頭には世界の人口は現在の2倍に達するといわれ、更に大きな資源の必要にせまられることでしょう。省資源、省エネルギーによる産業構造の改革と世界を指導する頭脳の開拓は諸君に課せられた任務でありましょう。

諸君は大学入学にあたり、覚悟を新たにし、誤ることなく、片よることなく、はたまた軽卒に付和雷同することなく、富山大学生として誇りをもち、責任ある行動をとっていただきたい。

朱熹の詩に

謂うなかれ 今日学はずして来日ありと
謂うなかれ 今年学はずして来年ありと
日月逝きぬ 歳我を延ばさず
嗚呼老いたり 是れ誰の愆ぞや
歲月は人を待たない。

今日只今おかれたところで全力を尽すことのできるものは即ち達人でしょう。140億の脳細胞を豊かな人間性と学問研究のため思う存分伸ばしていただきたい。

いうまでもなく、学問は敢くまでも自己との対決であり、己を磨くことであって、決して人と人との競争ではない。諸君の研究努力によって富山大学が世界の名門校になることも可能であります。世界人類が安全に幸福に生存できるために、諸君の力に期待するところまことに大なるものがあります。

希くは、明るく大らかに甘えることなく、不動の信念をもって大学生活を送られんことを切望して学長告辞といたします。

昭和53年4月10日

美 の 鑑 賞

教養部長 杉 本 新 平

人は誰でも美しいものを好む。しかし一口に美しいものといっても、実際に何が美しいものなのかというと、人々の意見は大いに違って来る。とくに茶の器物についてこの相違は著しい。美というものが我々の生活にいかにか密着しなければならないか、それを端的に教えているのは茶道であるが、一般に茶の世界では旧器が珍重される。しかし旧器必ずしも美器とは限らない。骨董品は主として稀少価値の故に、美術品は美的価値の故に尊重されるのであるから、骨董品が直ちに美術品であると考えれば、それは大きな謬見である。

私は何でも芸術が、とりわけ美術工芸が好きだ。いい作品には感心し心に喜びが湧いてくる。この場合、私は常に何よりも自分の実感を尊重する。どんな伝来があろうと世間でいかにもてはやされようと、卒直に自分に感動を与えないものは、どうしてもいいとは思えない。わかるとかわからないとかいう前に、本当にいいものは必ず人に感動を与えるものだと思う。例えば音楽会の会場に於て音楽のわかる人は果して聴衆の一割もあるだろうか、にも拘らずいい演奏のときはき

まって会場がシーンと静かになり、またいい芝居であれば観客が我を忘れて見とれている様は、この事実を証明するものであろう。いいものはいつでも我々を感動させずにはおかぬ。そしてこの感動が我々の心を浄め高めてくれるのである。芸術の芸術たる所以は一つにこのカタルシス(浄化作用)にあると、私は信じたい。

第二に私は芸術は人間(魂)の表現でなければならぬと思う。芸術作品が単なる工芸品や商品と異なるのは実にこの一点にあると思う。芸術はその仕事を通じてその人の生活の真実が出て来なくてはならない。作品は作家の自画像であり、作品が生活であり人間であるということが大切なのである。器の形は心に従い、器の深さは人間の深味であり性情の浄さである。岡倉天心は、「我々に訴えるのは手よりもむしろ魂であり、技術よりもむしろ人間である」といい、また武者小路実篤は、「絵が我々をひきつけるのは自然より美しいからではない。そこに一個の人間の魂が生きているからだ」と述べているが、全くその通りだと思う。

そして第三に思うことは、傑作は常に平凡なことである。平凡なもの必ずしも傑作ではないけれど

も、傑作にして平凡でないものはない。異形異様のもので傑作はない。平凡の非凡とでもいおうか、平凡でありながら凡作にはない厳しき、深き、気高きが感ぜられるところに、傑作の理法がある。岡倉天心は言う、「傑作はすべていかに親しみがあり、かつ共鳴していることか」と。思うに真の美しさは平凡簡素、無事尋常に宿るとのことである。平凡が平凡のままて非凡であるところに真に傑作たるの所以がある。異常なもの技巧的なものに本当の美しさは存しない。「巧」は「たくらみ」に通じ、そこにはウソや虚飾がある。「美しい」は「いつくしむ」、「愛する」という言葉に由来し、親愛を感ずるものにこそ美しさが寄に添っているのだと言ってもよいと思う。

私は梅原龍三郎、熊谷守一、坂本繁二郎の三人の画家が好きだ。西洋にもルノアールやゴーガン、マチスなど好きな人はあるけれども、日本の三人はそれ以上に好きだ。ゴーガンはいい、しかし熊谷さんの絵はあくまでも東洋の禪的なところがあって、私には尚更に親しみ易く、たまらないよきを感じずる。マチスは好きだ、しかし梅原さんはなお好きだ。ゴーガンと熊谷、マチスと梅原、この二組の両者間にはその作品に於て多少の類似性はあるが、しかしやはり西洋と東洋、有と無との違いのようなものが、作品の背後に感ぜられ

ないであろうか。坂本さんはカラーやミレーが好きで、坂本さんの絵にはどこかカラーやミレーに通ずるものを感じずるが、しかし決して同質ではない。曾て青木繁や岸田劉生の絵を批評して、「彼等の絵には物の裏側が描けていない」と坂本さんは言う。物の裏側とは感覚的表現を超えた目には見えないものへのつながりを意味している。絵画は物をうつした写真ではない。梅原さんの富士の絵を見よ、いかにも絵画的である。しかし却って自然の富士山以上に富士山らしく、なんと秀麗に見えることか。坂本さんの色の深き、熊谷さんの線の厳しき、梅原さんの豊かな絵画性！。いずれ劣らず感動を禁じえないのである。

そもそも美とはいかなるものか。西田幾多郎によれば、美感とは自己を離れた、一身の利害得失を忘れた時の快樂である。即ち美の感情は無我の感情であって、直接に我々の心底の琴線にふれるものである、という。美の根源は思考力によって得られる真理ではなくて、思慮分別を超越した直覚的の真理なのである。従ってわかるわからぬは大したことなく、いかなる作品に対しても常に純粋な自己の実感をこそ一番尊重すべきである。例えば絵を見るとき、耳によって絵を見てはならぬのである。しかし耳によって物を見る人のなんと多いことであろうか。(53.5.23)

新 任 教 官

- | | |
|---|--|
| ○山村 敬 教授(人文学部) 53.4.1
昭31. 6 東北大学旧制大学院文学研究科修了
担当：哲学 | 昭40. 3 一橋大学大学院社会学研究科博士課程
単位取得
担当：ロシア語・ロシア文学 |
| ○木下 喬 講師(人文学部) 53.4.1
昭50. 6 東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得
担当：哲学 | ○矢沢 英一 助教授(人文学部) 53.4.1
昭47. 3 早稲田大学大学院文学研究科博士課程
単位取得
担当：ロシア語・ロシア文学 |
| ○木下 良 教授(人文学部) 53.4.1
昭28. 3 京都帝大文学部史学科卒業
担当：人文地理学 | ○林 良重 助教授(教育学部) 53.4.1
昭18. 9 東京薬学専門学校卒業
担当：理科教育 |
| ○梶井 陟 教授(人文学部) 53.4.1
昭24. 3 東京第一師範学校本科卒業
担当：朝鮮語・朝鮮文学 | ○濱名 正道 講師(教育学部) 53.4.1
昭53. 3 東北大学大学院理学研究科博士課程
学専攻単位取得
担当：解析学及び応用数学 |
| ○藤本 幸夫 助教授(人文学部) 53.4.1
昭48. 3 京都大学大学院文学研究科
担当：朝鮮語・朝鮮文学 | ○山本 都久 助教授(教育学部) 53.4.2
昭40. 3 広島大学大学院教育学研究科修士課程
修了実験心理学専攻 |
| ○藤井 一行 教授(人文学部) 53.4.1 | |

- 担当：教育心理学
- 宇井 啓高 助教授（教育学部） 53.4.2
- 昭41. 3 名古屋大学大学院理学研究科修士課程
修了地球物理学専攻
担当：地学
- 広田 忍 講師（教育学部） 53.4.2
- 昭53. 3 東京教育大学大学院教育学研究科博士
課程教育学専攻単位取得
担当：教育学
- 遠藤 幸一 講師（教育学部） 53.4.16
- 昭52. 3 東京芸術大学大学院美術研究科芸術学
専門課程日本・東洋美術史専攻修士課
程修了
担当：美術理論・美術史
- 風巻 紀彦 教授（理学部） 53.4.1
- 昭42. 3 東北大学大学院理学研究科修士課程修了
担当：数理統計学
- 広岡 公夫 教授（理学部） 53.4.1
- 昭38. 3 京都大学大学院理学研究科地質鉱物学
専攻修士課程修了
担当：地殻構造学
- 川崎 一朗 助教授（理学部） 53.4.1

- 昭51. 3 東京大学大学院理学系研究科地球物理
学専門課程博士課程修了
担当：地殻構造学
- 堀越 勲 教授（理学部） 53.4.1
- 昭33. 3 東京大学大学院数物系研究科地質学専
門課程修士課程修了
担当：地殻進化学
- 日下部 実 助教授（理学部） 53.4.1
- 昭44. 3 東京教育大学大学院理学研究科博士課
程修了化学専攻
担当：地殻進化学
- 渡辺 信 助手（薬学部） 53.4.1
- 昭52. 3 北海道大学大学院理学研究科博士課程
修了
担当：衛生化学
- 平沢 良男 助手（工学部） 53.4.1
- 昭53. 3 富山大学大学院工学研究科機械工学専
攻修了
担当：機械工学科熱工学
- 山村 研一 助手（和漢薬研究所） 53.4.16
- 昭53. 3 大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
担当：病態生化学

富山に来て思う

人文学部教授 山村 敬

私は生粋の東男でありまして、北海道で育ち仙台で
過ごしてまいりました。北陸ははじめてで、それで、
上野行きの汽車が「下り」であったりするのを見て、
発想の大転換を迫られているような感じでギョッとし
たりしています。最近北海道の友から便りあり、「雪
国の御地でも、5月の晴間はきっと明るいことござ
いましょう」この通りの認識不足。でも彼の地の雪は
軽く乾いて傘のいらぬ雪なので、「雪国」のイメージ
が違うのでしょうか。ともかく雪には馴れています、
北海道は小樽の産でありますので、日本海とも馴染み
です。私の父は小樽高商（商大）に長く勤め、これを
愛しておりました。私はその雰囲気浸って育ちまし

た。旧高商は各地でそれぞれに特色のある発展をし大
きな役割りを果たしたようではありますが、小樽は東北の
外語などと呼ばれて外国語教育の高さに一つの特色が
あったようです。学生の演ずる外語劇を子供の頃から
毎年見せられました。ところで富山大も前身となる中
核の一つは旧高商でありました。私が赴任したのは人
文学部でありますから、こうしたやや遠廻りの縁を思
い起してみてもあまり意味がないようでもあります、
その人文学部は新しく歩みはじめた学部、父を通じた
思い出についで筆が外れるのも、まあしっかりやりな
さいと父が語りかけているせいなのかも知れません。

富山県と地理学 —— 赴任にあたって ——

人文学部教授 木下 良

4～5年前に別々の学会が富山大学で開かれて、2年

続けて訪れた頃には、まさかここに勤務するようにな

ろうとは夢にも思わなかったものである。富山の地については永年「地理」を教えているだけに、大体のことは知っているつもりでいたが、実際には住んでみると判らないことも多いだろう。この2月に訪れた時に、初めてスキー場の雪と街の雪とが異なるのに気付いて、早速ゴム長靴を買い求めたものである。

さて、富山県は人文地理学を専攻する者にとっては、かなりなじみの深い土地である。特に私が学んだ京都大学地理学教室の初代主任教授であった小川琢治博士は、日本の集落地理研究の草分けでもあるが、その最初に関心を寄せられたのが砺波平野の散村であった。その研究が1914年に発表されて以来、多くの研究者がこの問題にとりくんできた。私が学生であった1950年

頃も、大阪市立大学が調査を実施しており、京大に出講しておられた市大の村松繁樹教授から親しく砺波や、次いで調査された五箇山の話のうかがったものである。

地理的に興味深い対象の多い土地柄か、富山県は地理学研究の盛んなところで、本県出身の錚々たる学者が多数中央の学界でも活躍してられる。その地元にあえて他国者（私の出身地は九州である。）が入り込んで来た以上、なにがしかの緊張を覚えないではいられない。幸いに本学には他学部にも地理学関係の先生方がいらっしやるので、その御教示を仰ぎながら、せめて私の専門とする古代の歴史地理的研究においては、いくばくかの貢献を残したいものである。

朝鮮語・朝鮮文学科の誕生におもう

人文学部教授 梶 井 陟

私は過日2年生に対して行われたオリエンテーションの席上で、新設された朝鮮語・朝鮮文学科の講義内容についてごく大ざっぱに説明したあとで、次のようなことをつけ加えたことを記憶している。それは、

「みなさんはまだこの科ができたことの意味について深く考えていないかもしれないが、朝鮮語学科をもつ大学が、国立大学では現在まだわずかに三校にすぎないのだということ、そして〈朝鮮文学〉が正式な学科学科の名称としてつけられたのは、日本の歴史始まって以来おそらく本学がはじめてだろうということ、そして、だからこそ、これまで日本人にとっていちばん近くて遠かった朝鮮の言語や文学の成果を、手を伸ばせば得られるところに今自分達がいるのだということだけは銘記しておいてほしい。この科の専攻を希望するかしないかは別として…」

と、たしかこんなことばだったはずである。

富山大学に朝鮮語・朝鮮文学科ができたことを私が知ったのは、昨年7月だった。東京の夏の夜のむし暑さも手伝っていたのだろうが、私は興奮してよく眠れなかった。この情報といっしょに、私にその最初の担当者として来ないかという話があったからではない。朝鮮が日本の支配からはなれて三十余年経った今、やっと国立大学の一面に朝鮮文学が市民権を得て登場したということへの、驚ろきと喜びからであった。

先日、ある新聞社の記者から「富山大に朝鮮語・朝鮮文学科ができたことをどう思いますか」と質問された時、私は「オリエンテーションでこんなことを話したんですよ」と、前述のことばをそのまま紹介した。

あの夜の興奮は、今でも私のからだから消え去っていない。

槿域に近かく

人文学部朝鮮語・朝鮮文学科助教授 藤 本 幸 夫

槿域は、青丘・海東・東国等と共に、朝鮮の別称である。槿は我国ではムクゲというが、初夏から晩秋まで、淡紫・淡紅・白の花を、つつましくも華やかにつける。濃青の澄みわたった空に乱れ咲く様は、朝鮮文化の華麗さにも通じるものがある。

北陸・山陰の地は、古く朝鮮との関係にあっては、むしろ表日本であった。その地に朝鮮語・朝鮮文学科

の設けられたのは、関係各位の御努力は言うまでもないが、富山の旧権回復というような歴史の意志をすら感じさせる。

京都から一水隔てるのみの当地に来て、思いは早くも槿域に遊ぶ。弊科への皆様方の御支援を願ってやみません。どうぞよろしく願いいたします。

富山に来て

人文学部助教授 矢 沢 英 一

富山大学への話があったとき、知人であるロシア人にそのことを話すと、彼女はいつもの好奇心に満ちた表情で、富山とはいったいどんな町かと聞き返した。それが大変なところらしい。何しろ冬が長く、10月になれば雨また雨、そのあとは雪また雪の日が続くという、現に自分はこの冬はじめて富山を訪れたときは車で傘を、2回目には長靴を買わねばならなかった。そう答えると彼女は即座に、それはまさにモスクワだ、なんとすばらしい町にあなたは行くことか、と感嘆の声をあげた。彼女はモスクワに生まれ、モスクワに育った、生粋のモスクワっ子である。彼女にとってこの

世にモスクワほどすばらしいところはない。日本に来て1年半にしかならない彼女はモスクワが、モスクワの冬が無性に恋しいらしい。彼女重ねて曰く。東京の冬——あれは冬ではない。雪はないし、風冷たく、味気ない。

さて、ところで彼女のうらやむ地に私はやってきた。彼女の生まれた国の文学をやるために。いま、私は張りつめた気持で考えている。これから確実にめぐってくる富山の冬のことを、雪のことを、山や河、道行く人々のこと、そしてこの地に新しくロシア語・ロシア文学課程の生まれたことの意味を。

富山の印象

人文学部講師 木 下 喬

こちらへ参って早や一月半が過ぎました。仙台に生まれ育ち他の土地で暮したことのない私にとって、こちらに赴任するについては新しい土地と職務に対するそれなりの抱負と覚悟がありましたが、今のところ日日の生活と仕事に追われ、前後をかえりみる余裕がありません。断片的な印象のみ記してみます。無精で旅行もあまりしない方ですので、富山はもちろん初めてで、知識といっても「雪と菜」くらいのものでした。5月頃まで雪が残っているのかと思ひ、雪からの連想か、私のイメージでは富山はむしろ東北地方に近いものでした。ところがこちらへ参って早々に気温が30度

を超え、その南国ぶりに一驚させられた次第です。考えてみれば、初めて見る日本海に気を奪われているうちに、フォッサ・マグナを越えていたのです。富山が関西に属することは言葉からも納得されました。聞けば大伴家持が越中守であったとか。仏壇のCMがテレビに流れる土地柄でもあり、日本の古典や歴史に疎い私もなにやら調べてみたい気になります。それに日々仰ぎ見る壮麗な立山連峰も、無精な私の重い腰をあげさせそうです。しかしそれも夏休みまでオアツケで、今はただ一日も早く仕事に慣れたいと思っております。よろしくお願い致します。

新任の弁

教育学部助教授 林 良 重

17年ぶりに故郷に帰ってきました。このキャンパスは、私が精神的にも肉体的にも大変苦勞した軍隊の跡です。しかし、時はいまわしい軍隊の思い出をかなり忘れさせてくれています。

天気の良い日は、奥田新町の公務員宿舎から徒歩で通勤するように心がけております。といいますのは、身体のためというより、17年間時たま夢にみた峨々たる立山連峰の景観、昼夜淀まぬ神通の流声を心ゆくまで味わいたいからです。

立山、神通川そして澎湃の有磯の海は、私の幼少年時代をはぐくんでくれました。いまそのことをしみじみと実感しております。

ところで、富山大学の第一印象はといいますと、全く五里霧中といったところですが。東京での17年間に、東京教育大学附属校と東京学芸大学（非常勤講師）に勤務し、少しは大学のことは解っているつもりでしたが、本学に着任してみますと、何も解っていないことを自覚せざるを得ませんでした。

教育学部は現場（小・中・高校）と直結していますが、幸いに県下の現場には、私のかつての先輩、同僚の方々が活躍をされておりますので、それらの方々と密接に連絡をとり、微力ながら富山県の理科教育振

興に全力を傾注したいと念じております。何とぞ諸先生方のあたたかいご教導の程を心からお願い申し上げます。

新 任 の 弁

教育学部助教授 山 本 都 久

学生のころ、ある教授からこんな話を聞きました。「人間は年相応に頭も心も老化するものです。老化を少しでも先にのぼそうとするのならば、次の2つの心掛けを守らなければならないでしょう。1つは、教える者は学ぼうとする者に、ものを教えることが任務だから一生懸命に教えてあげるように心掛けなさい。もう1つは、教える者は学ぼうとする者からも多くのものを学ぶように心掛けなければなりません。ところが、普通は年をとるにつれて学ぼうとする者から何かを学びとろうとすること自体むずかしいことになります。

それだけに学びとろうとすることを心せねばならないでしょう。この2つの心掛けは密接不可分の関係にあって、いずれが原因・結果するのかわかりませんが、教える者に若々しさを保つことと常に学ぶ力を保たせてくれるものです。……」

16年前にこのキャンパスを巣立った私には、当時と比べて大きく変わった大学に接し、少々老化した自分を認めないわけにはいきません。それだけに、かつての先生のことばが、今の私にはとても大切なことばに思えてなりません。そんな心情の昨今です。

水

教育学部助教授 宇 井 啓 高

私は生まれてこのかた木曾川の水を飲んできました。それは古生界、花崗岩、流紋岩などの分布地域を流れ、犬山の取水口から名古屋市民に供給されてきました。これからは有峰湖水系（和田川）の水を飲むことになります。これは中生界、飛驒変成岩類——日本列島の土台をなす——の分布地域を流れてきます。有峰湖は立山連峰南部の薬師岳や太郎山近辺からの水をたたえ

ている訳です。私、富山市民は自分の県内の水、立山連峰の水、を他県に気兼ねなく飲める幸せな市民です。

ところで、大学の水は要注意のようです。名古屋で私は毎日水筒に木曾川の水を入れて通っていました。富山でもやっぱり同じです。先日真赤な水筒を買いました。そしてきょうも赤い水筒から和田川の水をコップについて、薬師を眺めながら飲んでいるのです。

新 任 の 弁

教育学部講師 浜 名 正 道

福島県相馬市の生まれで、相馬の町と学生生活を過ごした仙台以外の土地については何も知りませんでした。この度縁あって富山大学に就職いたしました。北陸地方を訪れるのは初めてで、富山についてもほとんど予備知識を持ちませんでした。富山市街は城下町らしい落ち着いたいい町だと思いました。

富山に来るまでは仙台で9年間学生生活を送りました。現在の生活もその頃とあまり変わっていないように思えます。今、私のいる研究室からは呉羽丘陵が見渡せます。これによく似た風景を窓外に見ながら、今

年の3月まで仙台の研究室で過ごして参りました。この地で少しずつ勉強して、よい仕事をしたいと思って居ります。浅学菲才な未熟者ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

新 任 の 弁

教育学部講師 広 田 忍

大学進学のため郷里をあとにして13年。まさか郷里にもどって来ようとは思ってもみなかった私が、今自分の郷里の大学で教鞭をとれるに至ったことを、心から嬉しく思っています。「十年一昔」の言葉のとおり、たしかに、慣れ親しんだ土地のあちこちが変わり、なつかしい人たちとの数々の思い出も夢のなかに消え去ろうとしています。それが、この思い出の地で、再び、新しい出会いを通して、新しい人の輪を作っているのだ、と思うと、夢が大きくふくらんでいきます。教育学という一本の糸で結ばれた多くの先生方や学生の皆さん、講義を介して語りあえる多くの学生の諸氏、

又、私の卒業した中学、高校の同窓生だという先生方や学生の人たち。こうした人たちに囲まれて、今、たどたどしい足取りですが、楽しい毎日を過ごしています。そして、これらの先生方、学生の皆さんと、共に“教育”にかかわりあいながら、自分の眼で見たものを、自分の言葉で、自由に語りあっていけるなら、と願っている今日この頃です。学生生活の長さのためか、いまだに「先生」らしからぬ雰囲気を漂わせている私です。至らない存在ですが、皆さんどうぞよろしくお願いたします。

所 感

教育学部講師 遠 藤 幸 一

先年、刑法・犯罪心理学の権威と云われる、ある有名大学名誉教授が某新聞紙上にこう書いていた。曰く、「家族ぐるみの商店などでは——中略——客が来なければ寝そべっていても、客の来たときだけ動けば、けっこう用は足りる。」商店の営業時間が短いという文章の一節である。私は商家に育ったが、この人が庶民に対し思い遣りを全く持ち合わせない、のみならず、額に汗して身過ぎ世過ぎせねばならぬ人びとを心の底で蔑視しているのに慄然とした。

今、大学に身を置くことになって、私は大学人にこのような人がいたことを恥かしく思う。と同時に、私は思う。この世の中、家族友人先輩始めあらゆる人び

とが、日々それぞれに精一杯生きており、それがどれ程尊い事であるかを身にしみて感じ、又、我が励みとし得る、謙虚な人間でありたい、と。

とはいうものの、晴れた日、眼前に広がる立山連峰の美しさは、俗世間の繰り言を吹き飛ばし、私の胸を幸福感で満たしてしまう。この富山の地へ来た幸運を大切に、充実した生活を送りたいと願っている今日この頃である。

尚、私は美術史を専攻しているが、この分野は所蔵家始め多くの方々の御理解と御協力がなければ、一歩も前進しない。古美術品についての情報、御教示をいただければ幸いです。

新任に際して一言

理学部教授 風 巻 紀 彦

私は数学を研究しています……と言うと、何かしら偉そうなことをしているように聞えるかも知れませんが、実際は自分が興味を持っている数学上の事柄を、勝手気儘に調べているに過ぎないのです。ケシカランとおっしゃる方がいるでしょうね。でも、研究とは本来そうした性質のものだろうと思いますし、また、大学というところは、その研究が具体的な利益に直結するか否かに関わることなく、自由な精神で研究ができ

る状態であるべきものなのです。至極当然のことにように思われるでしょうが、しかし、これは難しい問題でして、現に学問研究の自由が無視された暗い時代もあったのです。

ところで、5年間も全く論文を出さない先生がいるのはおかしいのではないか、という批判が近頃大学の内外にあります。しかし、良く考えてみますと、これには日本人の性急な国民性が色濃く作用しているよう

です。直ちに結果が出なければ承知しないと言うのでは、本質的な研究がなかなかできにくいものです。ある意味で、研究の自由を阻害する危険さもあります。特別難かしい問題に取り組んでいる場合は、そう簡単に結果が出るものじゃありません。もっと長い目で物事を観る態度が大切ではないでしょうか。勿論、研究

者としては、当面の問題解明に努力する一方で、絶えず充電を心掛けることが肝要です。

私の場合、これまで多忙の為、関連する他分野の勉強があまりできませんでした。これからは期待通り自分の時間が持てそうですので、それだけでも富山大学に来て良かったと、しみじみと感じている次第です。

地球科学科にご支援を！

理学部教授 広岡公夫

今年から新設された地球科学科の一員として、福井大学から転任して来ました。昔の地磁気がどのようなものであったかを調べるのが私の専門です。土・泥のような堆積物や岩石に過去の地磁気の記録が磁化として残されています。この記録を解読することによって、遠い昔には棒のようにまっすぐに延びていた日本の本州が、約1億年前に曲がって現在の弓なりの形になったのだといったような結果を導くことができます。最近では地磁気の強さと気候の変化の間に相関があるのだという話がよく聞かれます。立山や御岳からでた火山灰を使って、数万年前の地磁気変動を調べて気候との関係を明らかにしたいなどと考えています。

大学が異なると、慣習の細かい点がずい分違っていて、面くらうことがよくありますが、地球科学教室は現在全員が富山大学がはじめてのものばかりなので、教室全体で面くらっているような次第です。薬学部の移転との関係で当分使える実験室がないことや、私事になりますが、宿舎が以前より狭くなったことなど、生活環境も大きく変わり、これは一寸大変なことになりそうだなと、気持ちをひきしめにかかっているのが現状です。しかし、新しい教室の名に恥じないよう精一杯努力していくつもりでおりますので、どうかよろしく御支援下さいますようお願いいたします。

「なんでー。えー？」

理学部教授 堀越 勲

似ている、と思った。廊下の暗がり「数学の岩田です」と挨拶されたばかりである。私は富山生まれではあるが、富山に住んだのは終戦を挟んでの約9ヶ月だけである。神通中学（中部高校）での担任が数学の岩田先生であったことはよく記憶している、が名前を思い出せない。家へ帰って当時の「通告簿」を引っ張り出したが、残念ながら岩田という丸印だけである。ことは中部高校へ電話をかけて明らかになった。岩田先生に改めて御挨拶したことは言うまでもない。32年ぶりの奇遇であった。岩田先生についての最大の印象は、「なんでー。えー？」と言いながら、檻の中の熊のように生徒のまわりを往ったり来たりしたことであ

る。書くとはわりがにくい、Why? の「なんでー」である。まぐれ当たりは許されなかった。

話はとぶが、地球科学では自然の観察が大きな仕事になる。しかし、自然科学の本質とも言うべき「なんでー」によくわからないことが非常に多く、地球科学は記載的で魅力に乏しい印象を与えがちである。しかし、10年ほど前から「なんでー」の骨組みがわかりかけて来た。地球科学の革命と呼ばれるプレート・テクトニクスの登場である。新しく出来た地球科学教室も「なんでー」を探究する新しい中心として育てて欲しいものである。

引越 し

理学部助教授 日下部 実

自主的に引っ越しをしたのは初めてである。東京から移ってきた私にとって、富山は広々としていて気持

が良い。遠くが見えることが何よりもうれしい。身のまわりとか研究環境の整備はある程度、自分の能力次第という面があるが、もっと広い空間の環境は個人ではどうにもならないので、今の新しい環境に満足している。私が入れてもらっている大学の研究室も、今のところ広々している。机と本棚だけがポツンと置いてあるこの空間を、これからの本拠として快適なものにするように、わが七つ道具をあっちへ動かし、こっちへ動かししているうちに、どうやら自由エネルギーが極小の方向に落ち着いてきた。

考えてみると平衡状態とは、糸が時間の経過とともにさらにその性質を変えようとしないうちに、いわば自由エ

ネルギーが最小の状態である。一たび態勢が整った後では、そのような状態は研究・教育に必ずしも好ましいことではない。むしろ、非平衡で自由エネルギーが高い状態を保つように心がけるべきかも知れない。我々は本質的に不可逆な過程を経験している。立山連峰には太陽エネルギーの一形態である大量の雪が貯えられており、春から夏にかけてエネルギーの再放出が行われている。私もこの自然の節にならぬ、多くの方々からエネルギーを吸収してポテンシャルを高め、これをうまくコントロールして、今後の仕事に有効に利用したいと願っている。

富 山 と 地 震

理学部助教授 川 崎 一 朗

富山大学にくる事が決まった時、私は恐ろしい所へ行く事になったと思った。私の専門は地球物理学であり、その中で地震学である。その専門から言うと、富山一岐阜県境には、天生峠から、宮川、高原川、跡津川、有峰を西南西から東北東へ斜走し、顕著な断層谷を作る長さ60~80kmの日本で第一級の活断層、跡津川断層が存在する。

1858年2月26日(旧暦)、M(マグニチュード)7と推定される地震が北陸一帯を襲い、常願寺川上流では大蔭崩を生じ、川を塞止め、大量の水をたたえた。3月10日と4月26日の2度にわたって堰は崩れ、大量の泥水を常願寺川に押し出し、富山城下は大洪水にみまわれた。この地震の激震地は断層線上に集中していたので、跡津川断層が動いた事は確からしい。

1586年1月18日、M8と推定される大地震が北陸・畿内・東海・東山の地方を襲った。飛騨保木脇沢で大山崩が起こり、掃雲山城が埋没し城主以下多数が圧死した。富山も大きな被害を出した。この地震の素姓については、何しろ古い時代の事なので資料が少なくよくわかっていないが、跡津川断層の運動に関連しているのではないかというのが私の推測である。

他の地震学的諸事実を併せ考えると、跡津川断層は

数百年に一度位ずつ、断層の一部が交互に運動し(地震)、そのつど富山に大被害を与えている可能性が高い。

明治維新以後富山に大地震はなかったという事実は、富山には地震がないと受けとめるよりも、そろそろ大地震が来ても不思議ではないと受け止めるべきである。福井や新潟にはすでに大地震がおこった。次にあぶないのは、まだ最近起こっていない所、例えば富山である。特に有峰には、跡津川断層という上述のように大変な暴れん坊の真上に大きなダムがある。もし、これが地震によって崩壊すればどうなるか、地震学者の目にはなんとも恐ろしい。

ではいつどこで起こるのかという質問には今は答える事はできない。今年かもしれない。100年後かもしれない。富山近辺に密な観測網を張り、データを集積し、それを解析した上でなければ何も言えない。それには大変な時間と金がいる。早急に地震予知研究施設か自然災害研究施設のようなものが富山大学に附置され、専門家が增強される事が望ましい。

私自身は、本文が被害妄想に終わる事を切に望んでいる。災害などは起きないにこしたことはない。しかし、将来の為にできるだけの備えはした方がよい。

修業の旅の中止にあたって

薬学部助手 渡 辺 信

富山へは2年前の秋、植物学会で来たことがありま す。秋晴れの日でした。退屈な学会講演を聞くのに飽

き、近くの城山へふらふらと散歩にでた私ですが、その時の何か物寂しい秋の香りを忘れる事はできません。東北大→北大→東大と、布団と女房を抱えて修業の旅を続けた10年もの長い学生時代の中の記憶にのこるひとときです。

まだ赴任して2ヶ月、薬学部の学生としかつきあいはありませんが、富大生はとにかく真面目で素直で気立てがいいと感じます。男子学生はもう少し荒々しくあれと思いますが、女子学生は申し分ありません。このまま世間の垢に染まらず、すくすくと育て欲しい。私はこのか弱いドラ息子と可愛い娘達のために修業の

旅を中止します。もうどこにも移りたくありません。

私の研究対象は藻類です。藻類は地球でおこなわれる光合成のほとんどを賄っているにもかかわらず、他の生物と比べて基礎・応用共研究が遅れている生物です。しかし、藻類の培養技術も進歩しており、残り22年の20世紀と21世紀には医学・薬学を初め、多くの分野で藻類の研究者が増え、飛躍的な研究の発展をとげるでしょう。私の場合、薬学という学問分野で藻類学の地位を確固たるものにする事を夢みて、日夜研究と教育に励みます。

30年後の日本

和漢薬研究所助手 山村 研一

私の専攻は自然科学である。したがって政治経済のことについては素人である。しかし素人ながら気になることの多い世の中である。富山は日本という国家の中の一つの県であり、日本は地球上の数多くある国家の中の一つである。現代においては、世界の政治経済の動きに日本が無関係ではあり得ない。

新しい油田の発見がなく、世界で現在のままの石油消費が続けば、約30年で石油はなくなるそうである。石油の約98%を輸入に頼り、また現在ですら食料自給率が70%前後でしかない日本は、30年後にはいったいどうなっているのだろうか。政府は先の事を考えて

対策をたてているのであろうか。アメリカ合衆国は、自国で石油が採れるのに、貿易収支が赤字となるのもいとわず石油を輸入しているという。一方、日本は、貿易収支が黒字で、かつ円高となっているにもかかわらず、いっこうに石油を備蓄しておこうともしていない。果たして、日本政府は、20年30年先においても、研究の場とその資金を保障してくれるのであろうか。あるいは、研究どころではなく、国家そのものの存在が危機にさらされているのであろうか。研究の活動状態は、国の政治経済状態と密接に関係しているだけに気になってしかたがないのである。

新任の弁

工学部助手 平 沢 良 男

4月1日から機械工学科に勤務しております。とは言うものの、学生時代に勉強した部屋と数メートルしか離れていない場所で、しかも周囲の人々の顔ぶれも全く変わらないので、学生時代の延長のようなものですが、自分自身に対する厳しさを持ち続けていきたいと思っているこの頃です。学生の頃は気持の切換が悪く随分時間を無駄にしたものでしたが、本学職員となってからは有効に使えるようになってきました。これは非常に好ましい事と喜んでます。

平日は朝から夕方まで、研究室で基礎勉強、実験といった日々ですが、休日は大抵自分の好きな事をやっています。私は山や川が好きなので、趣味は釣り、サイクリングと自然に親しむものです。見知らぬ溪谷に

糸を垂れ、また、がたがた道の果ての小さな峠に胸をときめかせてペダルを踏んでいる時の充実感、日頃の雑踏の中での生活を忘れさせてくれる最良の治療であると信じています。

私の家は富山市の南、国立高専の近くです。交通は若干不便ですが、環境は良く騒音公害などは全く無縁で、特に冬の夜などは静寂そのもの、朝夕は裏庭をキジがウロウロと歩いていたりします。また、2階から見える剱岳、立山連峰も良く、初雪の頃は最高の眺望と言えます。このような環境で研究に励めることをうれしく思っています。

富山の印象

教養部教授 小島 覚

私が初めて富山にやって来た日、富山地方は時ならぬ吹雪に見舞われていた。着陸すら危ぶまれていた飛行機を降りたとたん、雪まじりの強い風がたたきつけて来た。つい数日前まで氷点下30度のエドモントンに生活していた身には、この程度の寒さはもの数ではない筈なのだが、人間の期待とは面白いもので、富山はエドモントンより暖かい筈だという先入観があり、それは事実としては正しいのだが、心理的には期待過剰だったのだろう。横なぐりの風が頬をかすめて行った時、思わず首をすくめ、ひどく寒い所に来たような気がしたものだった。しかし、その寒さもようやく和んで、桜が散り若葉の薫る季節になった。

そんなある日、ある先生に誘われて八尾の奥の深い谷をさかのぼって小さな山村を訪ねたことがあった。ちょうど雪どけの時期で、溪流は水かさをまして沫をあげ、岩崖には幾條もの滝がかかっていた。そしてひ

と口すくってふくんだ水のななとうまかったこと。富山地方は日本でも有数の多雨地帯であるが、この水量の豊かさはプレーリーの乾燥気候に馴れた身には、実に新鮮で印象的だった。

水は天からもらい水というが、これほど天の恩恵に浴せる所は世界広しと言えどもそう多くはない。この豊かな水と適度の温度環境が緑豊かな日本の自然を育てあげたのであろうが、この天恵の環境のもと日本の自然は驚くほどその復元力が高い。それがかえって自然の保全に対する日本人の安易な態度を生む原因になっているようにも思われる。

富山地方はまだ比較的人手の入っていない自然が残されていると聞く。それら自然を、ちょうど私達が祖先から受け継いだように、手つけずそのまま次代の人々へ贈り物として残すことも現代に生きるものの責務ではなかろうか。

富山大学構内交通規制の実施について

富山大学構内交通対策委員長 本田 弘

富山大学構内交通対策案についての「中間報告」は「学園ニュース」第24号（昭和52年9月26日発行）に掲載されている。構内交通対策委員会は、以後引き続き作業を重ね、「富山大学構内交通規制に関する暫定実施要項(案)」と「富山大学構内交通規則に関する暫定実施細目(案)」とを作成して、昭和52年12月16日これらを学長に答申した。この答申を受けて、評議会は、昭和53年2月17日構内交通対策委員会案を審議、決定した。

評議会が定めた「富山大学構内交通規則に関する暫定要項」と、これに基づいて定められた「富山大学構内交通規制に関する暫定実施細目」とは以下に示されているとおりである。

駐車場の使用等を含めての交通規制の一部は、すでに実施されているが、構内交通規制の全面的実施は、本年7月1日からである。7月1日からは、自動車、自動二輪車、自転車等⁽⁴⁾車で通勤・通学している教職員・学生は、すべて定められた事項を守らなければならないことになる。

ところで、この構内交通規制は、本学構内を歩行する教職員・学生の安全と教育研究環境の静謐とをはかることを目的としているものである。自動車、自動二輪車、自転車等⁽⁴⁾車で通学している学生はもとより、徒歩や交通機関を利用して通学している学生もまたこの目的及び以下に示されている「暫定要項」と「暫定実施細目」とを正しく理解して、本学構内の交通規制に協力されることを願う。

また、この「暫定要項」と「暫定実施細目」とは充分な検討を経て作成されたものである。しかし、構内交通規制を実施する中で、「暫定要項」等に種々問題点のあることが発見されるかもしれない。改正を必要とすると思われる箇所や問題点に気付いた場合は、学生もまた、各学部・教養部の構内交通対策委員や交通指導員にそれらのことを申し出ていただきたい。構内交通対策委員会は、改正すべき点は改正して、より安全であり、より静かなキャンパスの確立をはかりたいと、考えているわけである。

なお、掲示等によって明らかであるように、駐車登

録の手続は既に開発されている。自動車等で通学している学生のうち、まだ登録手続をすませている有資格の学生は、所属する学部・教養部の学務係に駐車許可申請書を提出して、6月30日までに駐車許可書を受け取ることができるようにしておいていただきたい。

◇工学部地区について

工学部においても、構内交通規制が本年7月1日から実施される予定であるが、実施は若干遅れるかもしれない。交通規制の実施が決定され次第、工学部学生には必要な事がらを別に発表して、協力をお願いしたい、と考えている。

富山大学構内交通規制に関する暫定要項

(目的)

第1条 この要項は、富山大学五福地区(以下「本学」という)構内における車両(自動車、自動二輪車、原動機付自転車等をいう。以下同じ。)の交通に関し、暫定的規制を行い、構内における歩行者の安全と教育研究のための環境保全を図ることを目的とする。

(入構資格)

第2条 本学に入構できる車両は、次に掲げるものとする。

- (1) 本学の教育研究及び事務に必要な車両
- (2) 職員の通勤及び学生の通学上必要な車両
- (3) 本学に用務をもって来学する車両(以下「外来車」という。)
- (4) その他本学が特に必要と認める車両

2 本学に用務のない車両は、構内を通過し、又は駐車することができない。

(運行規制)

第3条 本学構内で車両を運行する者は、定められた交通方法と交通道徳を守り、歩行者の安全と騒音防止に努めなければならない。

- 2 本学構内を運行する車両の最高速度は、20キロメートル毎時とする。
- 3 本学構内に区間及び時間等を定め、標識により一方通行、進入禁止及び駐車禁止の措置をとることができる。
- 4 車両は、入構地点から最短経路を通り駐車場へ行くものとし、構内の移動には図書・物品等の運搬を除いて、原則として用いない。

(駐車登録)

第4条 本学構内に駐車しようとする者は、あらかじめ駐車許可申請書を部局の長に提出し、その許可を受けなければならない。ただし、やむを得ない臨時の駐車を除く。

2 前項本文の規定による申請を受理した部局の長は、別に定めるところにより、許可証を交付する。

3 前項の規定による許可証を交付された者は、車両の指定された箇所に表示しなければならない。
(駐車禁止区域等)

第5条 本学正門から中央図書館に至るまでのメインストリート(中央通行帯及び両側歩道)には、駐停車することができない。

2 各部局の玄関前は、公用車、外来車及び図書・物品等の運搬のため、やむを得ず運行が必要な車両に限り、一時駐車することができる。

3 消火栓、消防用防火水槽及び水道用バルブボックスから5メートルの範囲内に駐車することができない。
(駐車場等)

第6条 構内に駐車場等を設置し、別に定める方法により使用させる。

(駐車規制)

第7条 第4条の規定により駐車を許可された車両は、所定の駐車場以外に駐車してはならない。ただし、所定の駐車場が満車のときは、第5条に規定する駐車禁止区域以外の場所に駐車することができる。

2 自動二輪車及び原動機付自転車は、専用駐車場以外で駐車してはならない。

3 自転車は、定められた自転車置場に置くようにしなければならない。

(冬期積雪等特別対策)

第8条 冬期の積雪時並びに本学の行事等のため、期間を定めて第2条及至第7条の規定にかかわらず、別段の定めをすることができる。

(交通指導員)

第9条 部局の長は、駐車規制等の対策を円滑に実施するため、当該部局に所属する職員のうちから交通指導員を若干名委嘱し、交通対策に関する必要な措置を講じなければならない。

(違反規制)

第10条 警務員は、違反者に対して口頭の注意、注意書の貼付等、必要な措置をとるものとする。

(緊急自動車等の特例)

第11条 この要項は、緊急自動車等については適用し

ないものとする。

(改正の手続)

第12条 この要項を改正しようとするときは、富山大学構内交通対策委員会（以下「委員会」という。）の議を経るものとする。

(疑義の決定)

第13条 この要項について疑義のあるときは、委員会がこれを決定する。

(細目)

第14条 この要項の実施のため、必要な手続等は、委員会の議を経て、別に定めるものとする。

(事務)

第15条 この要項の実施に関する事務は、経理部主計課において行う。

附 則

この要項は、昭和53年4月1日から実施する。ただし、第4条、第9条及び第10条の規定については、当分の間、この適用から除外する。

富山大学構内交通規制に関する暫定実施細目

(趣 旨)

第1条 この細目は、富山大学構内交通規制に関する暫定要項（以下「要項」という。）第14条の規定に基づき、必要な事項を定める。

(通過交通制限)

第2条 本学に用務のない車両の通過を規制するため、正門及び西門において、適宜、駐車許可証の確認等、必要な処置を講ずるものとする。

(登録車両)

第3条 本学に勤務する職員、学生等の車両は、駐車登録をしなければならない。ただし、通勤・通学に使用しない車両で、次の各号に掲げる場合に限り、駐車登録を要しない。

- (1) 教育研究に必要な図書・物品等を運搬するための短時間の入構
- (2) 本学に送迎のための短時間の入構
- (3) 病気、緊急の用務、その他やむを得ない事由による短時間の入構

2 次の各号に掲げる外来車は、あらかじめ駐車登録をしなければならない。

- (1) 本学に常時出入りする業者の車両
- (2) 本学の工事関係者の車両

(3) その他継続的に入構及び駐車を必要とする車両

3 前項の規定にかかわらず、次の各号に掲げる外来車は、駐車登録を要しない。

- (1) 郵便車
- (2) タクシー、バス
- (3) 図書・物品等を運搬する車両で臨時に来学するもの
- (4) その他本学に用務のために臨時に来学する車両（駐車許可申請）

第4条 要項第4条第1項の規定による駐車許可申請書（以下「申請書」という。）の様式は、次のとおりとする。

- (1) 学内者用 別紙第1号様式（省略）
- (2) 外来者用 別紙第1号の2様式（省略）

2 前項の申請書の提出先は、別表第1に掲げるとおりとする。

(許可証の交付)

第5条 申請書を受理した部局の長は、別紙第3号様式の車両駐車許可台帳（省略）に記載し、駐車許可証（以下「許可証」という。）を交付するものとする。ただし、本学から1キロメートルの範囲内に居住する者の申請は、教育研究に必要な車両並びに身体障害者の車両等を除き、許可されない。

2 許可証は、別表第2の定めにより色別し、様式は次のとおりとする。

- (1) 学内者用 別紙第2号様式（省略）
- (2) 外来者用 別紙第2号の2様式（省略）

3 工学部の職員及び学生が、本学に入構し、駐車するときは、別に定めるところにより、工学部長が交付する証をもって許可証に代えることができる。

(駐車禁止区域等)

第6条 駐車禁止区域等は、別図に示すとおりとし、これを掲示する。

(駐車場)

第7条 駐車場は、別図に示すとおりとし、これを掲示する。

2 駐車場内の車両の移動は、最徐行とし、事故防止に努めるものとする。

3 駐車は、別表第2のとおり部局別に駐車場及び駐車地区を指定する。

(冬期積雪等特別対策)

第8条 要項第8条の規定による冬期積雪等特別対策は、委員会の議を経て、学長が定めるものとする。

(交通指導員)

第9条 要項第9条の規定による交通指導員は、次の職員をもって充てる。

- (1) 各学部，教養部及び短期大学の教官 各2名
- (2) 事務局，学生部（保健管理センターを含む。以下同じ），各学部，教養部，附属図書館及び短期大学の事務系職員 各2名

2 前項の指導員の任期は，2年とし，再任を妨げない。ただし，その補欠の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

3 第1項の指導員は，次に掲げる措置を講ずるものとする。

- (1) 別図に示す部局担当地区内の交通に関する指導及び実態調査
- (2) その他本学の交通に関し，必要な事項

(違反規制)

第10条 警務員は，違反車両に対して次に掲げる措置を執るものとする。

(1) 違反を現認したとき及び違反者が確認できるときは，口頭で注意する。

(2) 運転者が不在の違反車両に対しては，次の注意書を貼付する。

- ア 駐車違反注意書 別紙第4号様式(省略)
- イ 駐車登録違反注意書 別紙第5号様式(省略)

(緊急自動車等の特例)

第11条 要項第11条に規定する緊急自動車等は，救急車，消防車等をいう。

附 則

この細目は，昭和53年7月1日から実施する。

別表第1




区 分	申 請 書 提 出 先	
職 員	事務局及び学生部にあっては庶務部庶務課庶務係 学部等にあっては庶務係又は総務係	
学 生	学部又は教養部の学務係	
福利厚生施設職員	学生部厚生課厚生係	
外 来 者	工事関係業者	施設課企画係
	物品関係業者	事務局及び学生部にあっては経理部経理課用度係 学部等にあっては会計係又は総務係
	福利厚生施設関係業者	学生部厚生課厚生係

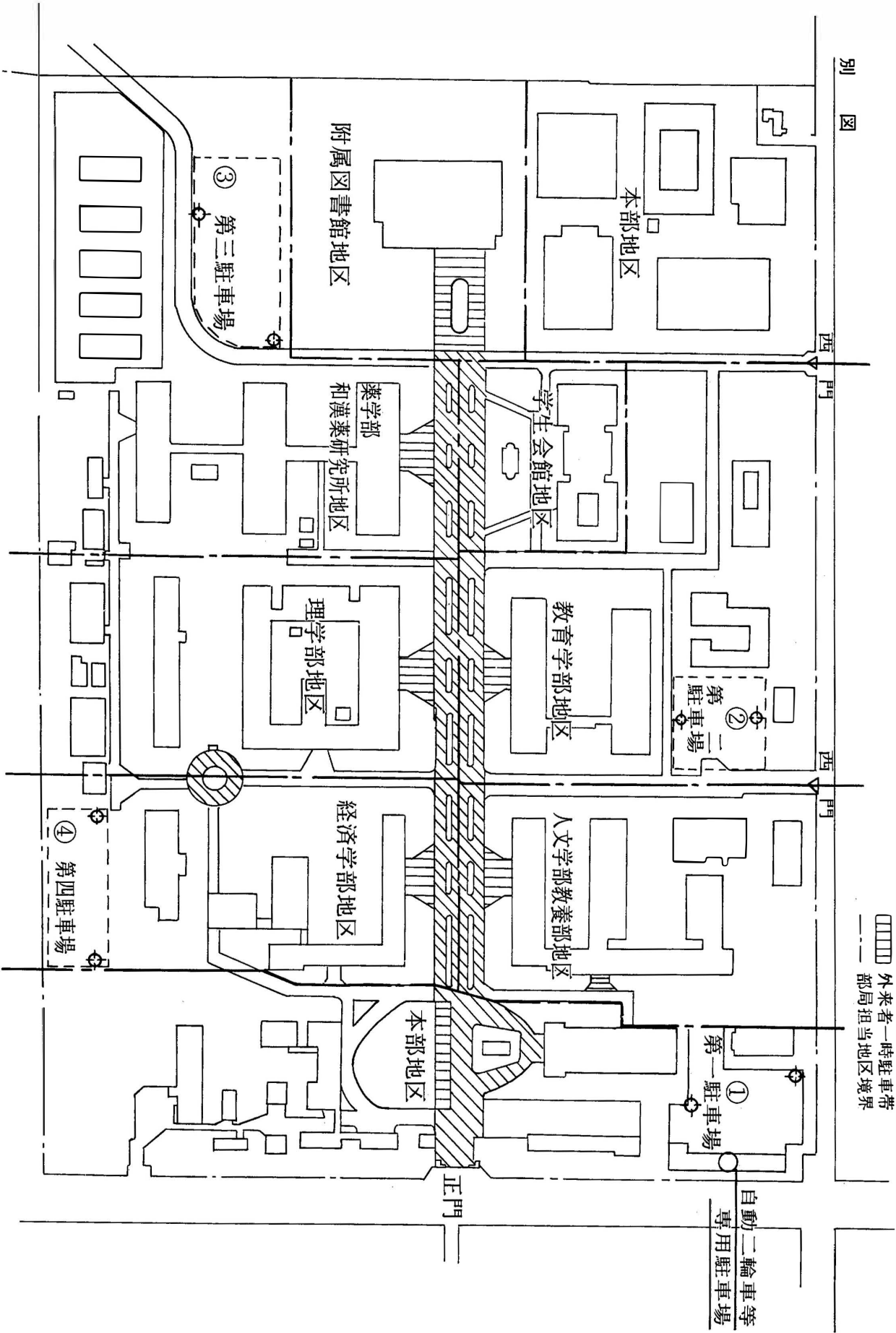
別表第2

駐 車 場	車 両 の 区 分	許可証の色
第1駐車場及び第1駐車地区	事務局及び学生部職員人文学部職員及び学生 教養部（文系）職員及び学生，工学部職員及び学生	白 色
第2駐車場及び第2駐車地区	教育学部職員（附属学校の職員を含む。）及び学生	黄 色
第3駐車場及び第3駐車地区	薬学部職員及び学生 附属図書館職員，福利厚生施設職員	青 色
第4駐車場及び第4駐車地区	経済学部職員及び学生，理学部職員及び学生 教養部（理系）職員及び学生 経営短期大学部職員及び学生	灰 色
共 通	外 来 者	赤 色

富山大学建物配置図

凡例

-  駐車禁止区域
-  外来者一時駐車帯
-  部局担当地区境界



人文学部の校舎について

人文学部施設委員長 山 口 博

文理学部文学科の学生定員は80名であった。人文学部は160名である。今までの倍の教室が必要である。教官数も増加する。研究室がさらに必要になる。実験講座である文化人類学などには実験室がいる。

人文学部の校舎をどうするか。人文系校舎は図書館を中心に配置したい。附属図書館の南東テニスコート側に新校舎を建てる計画をかなり以前から抱いていた。今もその望みを捨てたわけではない。

諸般の事情がその新校舎の建設を認めてくれるまで人文学部は現在の建物を使用する。メインストリート

に面した校舎一階から四階までを人文学部が専用、それに接続する黒田講堂側及び増築部分を教養部が専用することになった。

増築部分の完成は今秋と考えられるので、それをまわって人文学部、教養部の研究室・教室の配置換が行われる。

配置換後の人文学部校舎は、一階事務部門、二階は人文科学系、三・四階は語学文学科系の研究室・教室となる予定である。現在の教養部三番教室も人文学部大教室として使用される。

人文学部のカリキュラムについて

人文学部カリキュラム委員長 本 田 弘

人文学部創設の理念の具体的実現は、ある意味においては、各履修コースのカリキュラムをとおしてであると、いいうるであろう。大学においては、研究と教育とは不可分であり、学問の研究者としての教官が自己の研究した事からを授業において示すというのが、大学の基本だからである。

ところで、人文学部の研究組織は昭和55年度に完成する。学科目数20、教官定員38というのが、その規模である。しかし、この数は、量的には、やや乏しいといわざるをえないであろう。そのかぎりにおいて、われわれは特色あるカリキュラムの編成につとめたが、

当初の意図は必ずしも充分には達成されえなかった。

しかしながら、カリキュラムの編成においては、特定の学問領域を深く探究することを志向する学生には、そのことが可能であるように、また、特定の学問領域を中心としながらも、総合的学際的に広く学問を探究することを志向する学生には、そのことが可能であるようにということが、なによりも配慮されている。

人文学部の学生が、自己の個性と能力とに依じて、それぞれの履修コースの授業科目を選択して学習に励みさえすれば、おのずから豊かな学識が身につくのではなかろうかと、思っている。

学部だより

●教育学部

○教育学部の自転車置場設置について

＜教育学部会計係＞

最近、自動車がだんだんと多くなって来ましたが、自転車も使い方により、やはりなくてはならないものであります。また、暖かい季節になって来ますと利用される職員や学生が多くなって来ます。

本学部も自転車置場がないところから、正面玄関前のメインストリートの歩道上に自転車を仮に置いてお

りましたが、歩行上非常に支障がありました。また、上屋がないので、雨天の場合は自転車が濡れるので、上屋がある自転車置場が必要にせまられていました。

今度、本部の方々の御援助により、本学部の第一棟と第二棟の北側の間に本学部の自転車置場を設置いたしました。学生諸君には掲示によりお知らせしましたが、中には従来所々に依然として置いて行く学生があるため、その都度その旨を記した紙を張っておりますが、この紙上をお借りして諸君に重ねてお知らせすると共に、正面玄関前及びメインストリートの歩道に置かないようお願いいたします。

○教員養成大学・学部学生海外派遣制度について ＜教育学部学務係＞

この制度は、昭和48年度から国立教員養成大学・学部の学生を対象として諸外国の大学に留学させ、国際的視野と広い識見を身につけ、初等・中等教育の充実と振興に寄与させる目的で作られたものである。当初25名程度としていたものが昭和52年度においては100名程度までに増員されている。

留学生は、世界各国7地域（アジア、中近東、アフリカ、オセアニア、北米、中南米、ヨーロッパ）に亘って募集されている。

本学部では、昭和49年度に『学園ニュース』No.18号で既報の小学校教員養成課程、杉政明美が、第1回留学生としてドイツ連邦共和国（西ドイツ）のロイトリンゲン教育大学へ派遣されて以来、毎年1名ずつ同大学に派遣され、昭和53年度も同じく候補者として1名が内定している。

留学生派遣に際しては、文部省は適任と思われる候補者に対して、その地域に定められた額の予算措置をするが、受入れ大学の斡旋等には関与しないので、直接当該大学と派遣希望の大学とが協議し承諾を取りつけることになっている。

留学中の奨学金の支給額は、北米地域の135,000円を最高にアフリカ地域の50,000円が最低となっている。

本学部では、幸い大塚恵一教授が昭和42年度ドイツ連邦共和国に在外研究員として滞在中に親交を深められた、ロイトリンゲン教育大学マウラー教授の特別のご好意により、同大学への派遣が具体化し、以後、マウラー教授はもとより関係教授が挙って本学部学生の派遣に対し積極的に協力されるに及んでいる。これを機縁に同大学のキュンメル教授やシュティーフェル教授が客員教授として来日され、本学部において講演されるなど両大学の関係が極めて親密なものとなり、派遣学生が安心して留学できるようになった。

派遣候補学生は、同大学での履修に支障をきたさない程度の語学力を養うために、予め、夏期・冬期休暇を利用して東京の語学教育センター等においてドイツ語のレッスンを受けている。

留学中は『学園ニュース』No.18号、No.21号、No.25号で既報のとおり、専攻の学業は勿論、世界各国の留学生と共に楽しく学園生活に親しみながら、与えられた10か月間を有意義に過している。

当初は暗中模索であった派遣関係事務が今日のように

スムーズに運ばれるようになった。世話された大塚教授、シャイフェレ講師(元文理学部)のおかげである。

教育学部としては、このようにロイトリンゲン教育大学と益々交友を深めると共に、他大学のように同時に数名を世界各国（指定）に派遣されるようになることが理想である。

●理 学 部

昭和53年4月より理学部に大学院理学研究科（修士課程）が設置され、数学専攻8名、物理学専攻8名、化学専攻10名、生物学専攻8名の募集が行なわれ、4月下旬14名の合格者が決定した。

●工 学 部

—— L E E D / A E S 表面分析装置が稼働 ——

工学部の研究設備は年々充実されて来ているが、このほど昭和52年度の文部省特定研究経費などの援助をえて、L E E D (低速電子線回析) / A E S (オージェ電子分光) 装置が、その運営管理に当る電子工学科基礎電子工学講座（市村教授）の研究室に設置された。

この装置の導入によって表面科学の研究開発は大いに期待され、半導体、金属、絶縁体などの表面構造や状態、組成、固体表面の電子状態、触媒活性や被毒状態、吸着現象、合金の表面組成や結晶の析出など、工学ばかりでなく基礎科学の面でも研究の推進に活潑に役立てられることになろう。また、この装置にはE S C A (X線光電子分光分析計) / A E S の分析装置が付設できるので、将来はE S C A / L E E D / A E S 装置として完成され、より幅広い研究の進展に貢献するという大きな希望がもたれている。

管理講座では、学内はもとより広く地域産業界にも役立たせる計画を進めており、現在、学内の研究者が使用申請書を提出すれば測定日時を連絡し、その日に試料を持参すれば担当者が測定を行うという手順で運営されており、使用申請書をはじめ詳細については、電子工学科（電話内線309または311）に問合せられたいとのことである。

————— 学生部だより —————

第30回北陸四大学学生総合体育大会が本学当番で、別記競技会場で開催されます。教職員・学生諸兄の多数の御声援をお願いいたします。

競 技 日 程

種 目	期 日	開始時間	競 技 会 場	競 技 方 法 お よ び 小 種 目	
陸上競技	男・女	7月9日	10:00	富山県営陸上競技場	男子(トラック) 100m, 200m, 400m, 800m, 1,500m, 110mH, 400mH, 3,000m s c, 400mR, 1,600mR, 5,000m (フィールド)走幅跳, 三段跳, 走高跳, 棒高跳, 円盤投, 砲丸投, 槍投, ハンマー投 女子(トラック)100m, 200m, 400m, 800m, 100mH, 400mH (フィールド)走幅跳, 走高跳, 円盤投, 砲丸投, 槍投
野 球	男	7月9日(雨天の場合は10日に延期)	9:00	富山県営球場	リーグ戦
庭 球	男・女	7月7日 8日 9日	9:30	富山大学コート	団体リーグ戦) 男子 4複7単 女子 2複3単
軟式庭球	男・女	7月9日(雨天の場合は10日に延期)	9:30	高岡市前田コート	団体(点取りリーグ) 男子 5チーム9セット 女子 3チーム9セット 個人(トーナメント) 男子15チーム以内9セット 女子10チーム以内9セット
卓 球	男・女	7月9日	10:00	富山大学第二体育館	団体(リーグ戦) 男子 4複7単 女子 2複5単 個人トーナメント(シングルのみ) 男子20名以内 女子12名以内
バドミントン	男・女	7月8日 9日	8日 13:00 9日 9:00	高岡市民体育館	団体(点取りリーグ) 男子 3複4単 女子 2複3単 個人トーナメント シングルス 男子12名以内 女子10名以内 ダブルス 男子6組以内 女子5組以内
バレーボール	男・女	7月9日	10:00	富山医科薬科大学体育館	トーナメント5セット 3位決定戦
サッカー	男	6月17・18日 7月2日 7月9日	14:00	富山大学グラウンド	リーグ戦 (45-5-45)
ラグビーフットボール	男	6月25日 7月2日 7月9日	14:00	富山大学第二グラウンド(6/25, 7/2) 富山工業高校グラウンド(7/9)	リーグ戦(未決定のとき引分け) (35-5-35)
剣 道	男・女	7月9日	9:00	富山県営武道館	団体(点取りリーグ)男子11名以内(登録は15名以内) 女子 5名以内(登録は7名以内) 個人(トーナメント) 男子10名以内 女子 5名以内
柔 道	男	7月2日	10:00	富山大学武道場	団体(点取りリーグ)13名 個人(トーナメント) 6名以内
バスケットボール	男・女	7月9日	10:00	富山中部高校体育館	トーナメント戦 3位決定戦
水 泳	男・女	7月9日	10:00	富山市民プール	自由形 100m, 200m, 400m, 800m 背 泳 100m, 200m 平 泳 100m, 200m バタフライ 100m, 200m メドレーリレー 400m リレー 200m, 800m 個人メドレー 200m
ヨ ッ ト	男	7月8日 9日	9:00	阿尾湾	総合と種目別(スナイプ 470級) 1種目艇制
準硬式野球	男	7月9日(雨天の場合は10日に延期)	9:00	富山大学グラウンド	トーナメント戦 3位決定戦
ハンドボール	男	7月9日	10:00	富山大学体育館	リーグ戦 7人制 (30-10-30)
空 手 道	男	7月9日	10:00	富山大学武道場	団体 自由組手(5組) リーグ戦 個人 自由組手各校4名以内2分1本勝負 (引分けの時2分延長 後判定)トーナメント戦
弓 道	男・女	7月9日	9:00	富山県練成館	団体 男子 8名(1人20射計160射) 女子 4名(1人20射計 80射) 四ツ矢 5回個人 団体戦出場者及び男女 8名 (20射中の中数の多い者)
体 操	男・女	7月9日	10:00	富山商業高等学校体育館	男子 床運動, 鞍馬, 平行棒, つり輪, 跳馬, 鉄棒 女子 床運動, 段違平行棒, 平均台, 跳馬
自 動 車	男・女	7月9日	7:30	呉羽自動車学校	ファイアレース (1) 軽四輪(550cc以下) (2) 小型トラック(ナンバーキャブ オーバータイプ) (3) 小型乗用車 (4) 普通乗用車 団体 各種目に2名 個人 各種目出場者2名以内
創作舞踊	男・女	7月8日	14:00	富山大学学生会館	公開演技
小林寺拳法	男	7月8日	13:00	富山大学第二体育館	団体演武, 組演武, 個人乱捕, リーグ戦
合 気 道	男・女	7月8日	13:00	富山大学武道場	団体演武, 組演武

